

白馬空を行く（三田市本庄）

今から、千四百年ほどむかしのことであります。

九州豊前〈きゅうしゅうぶぜん〉の国のひしがた池のほとりに、三歳になる一人〈ひとり〉の童子〈どうじ〉があらわれて、「われは八幡大菩薩〈はちまんだいぼさつ〉である。自由自在に神に通ずるおそろしい力をもっているのだ！」といました。人びとは、不思議〈ふしぎ〉に思っで見守っていましたが、たちまち八流〈はちりゅう〉の旗をなびかせて、鈴の音もさわやかに白馬に乗って中天〈ちゅうてん〉高くとんでいってしまいました。

ちょうどその頃、摂津〈せつづ〉の国三田本庄〈ほんじょう〉のあたりに紫色のめでたい雲が立ちのぼっているのをみて、こここそよい住居〈すまい〉だと飛んで来たのであります。

それから後のことでありますが、九州の南方大隈〈おおすみ〉、日向〈ひゅうが〉の国あたりにわるものが大乱をおこしたので、朝廷では宇佐の八幡宮に戦〈いくさ〉に勝つようと、祈願〈きがん〉をこめて、豊後〈ぶんご〉の守宇奴〈かみうぬ〉の首〈ふび〉の男人〈おびと〉という大将をつかわしてこれを討たせました。この時も八流の旗をたなびかせ、鈴の音も天にひびいたかと思うと、どこからか八幡大菩薩が白馬に乗って飛んできて、官軍をたすけたので大勝利となりました。



白馬について、めずらしいできごとが二回も現われました。人びとは、ますます神をおそれ立派なご殿〈ごてん〉を造ってていねいにおまつりをしました。

その時、幣〈しで〉を建てたところを幣島〈しでじま〉とって、地名が残っています。八流の神の旗をなびかせてとんで来たところに幡石〈はたいし〉という地名があり、鈴の音のひびいて来たところを鈴石とっています。

なお、大音所〈だいおんじょ〉という地名が残っているのは、白馬にまたがって本庄の土地にこられた時に、大音響〈だいおんきょう〉をあげて来られたのでその地名がのこり、今日幡尻〈はたじり〉という地名が残っているのは、その旗がなびいて旗のすそがすれたところをいうのであります。

本庄に須磨田〈すまだ〉という地名がありますが、八幡大菩薩が住みつかれたからいのであります。

九州宇佐八幡宮から、中天を白馬に乗って飛んでこられたので、ここを駒宇佐八幡宮とっております。

夏にひでりがつづいて雨のふらないとき、この八幡宮にねがいをかけてお祭りをします。このお祭りにはお米が百石はかかるというので、「百石踊〈おどり〉」という名のついた有名なおどりが今でも残っています。このお祭りをすると必ず七日のうちに、大雨がふると昔からいつたえられています。

